

ジェンダー六法



■ 山下 泰子、辻村 みよ子、浅倉 むつ子、二宮 周平、戒能 民江
編集
■ 信山社
■ 2011年初版
■ 3,200円(税別)

本書はコンパクトな体裁をとりながら、多岐にわたるジェンダーに関わる法律等を、I 条約・国際基準、II 憲法と男女共同参画、III 労働と社会保障、IV 家族生活、V 性・身体・暴力の5つの領域に整理する。収録されているのは、法律だけではない。その具体的な運用にかかる施行規則(育児介護休業法施行規則等)やガイドライン(セクシュアル・ハラスメントに関する均等法指針等)、重要な基本政策(第3次男女共同参画基本計画等)、先進的な地方条例、さらには国内法だけでなく国際条約(女子差別撤廃条約等)やその選択議定書、行動計画(人身取引対策行動計画2009等)など、いずれもジェンダー法の解釈・運用のための重要な素材163件を網羅している。

各領域のはじめには、それぞれの領域で現代日本のジェンダー法学を代表し、また、政策や裁判などにも関わりの深い5人の編者による簡潔な解説がほどこされている。ジェンダー法の学習・研究者や法律実務家はもとより、ジェンダー法に関心のある

すべての者にとって待望の六法と言えよう。巻末の「ジェンダー関連年表」は、各時期のジェンダー法のトピックを知る上でも興味深い。

ジェンダー法

ジェンダー法は、法を捉える「視点」に着目した概念であって、「ジェンダー法」という名称の法律があるわけではない。2003年には、「法学をジェンダーの視点から研究、討議すること目的とする」ジェンダー法研究会も日本で設立された。ただ、ジェンダー法研究は、それぞれの専門領域(憲法、労働法、家族法、国際法等)におけるジェンダーの問題を捉えることを出発点に発展してきたこともあり、全体としてジェンダー法の分野には、具体的にはどのような法律や規則等が含まれるのかを一覧的に把握することは結構難しいことであった。その意味で、ジェンダー法の全体像を知る上で要を得た『ジェンダー六法』の誕生を喜びたい。日本ジェンダー法研究史の画期的到来である。

まつもと
松本 克美 (立命館大学法科大学院教授)



モモタロー・ノー・リターン&サルカニ・バイオレンス —昔むかし、ジェンダーがありましたとさ……



■ 奥山 和弘 著
■ 十月舎
■ 2011年初版
■ 1,000円(税別)

本書は、時代の風雪に耐えて生きのびてきた昔話をジェンダーの視点で語り直したリメイクである。日本人ならだれもが幼い頃に慣れ親しんだ「桃太郎」「金太郎」など6話を下敷きにしている。そのため、2つのインパクトを持つ。

1つは、心の深層をゆさぶる。「桃太郎」冒頭の「おじいさんは柴刈りに、おばあさんは川へ洗たくに」は、「桃太郎」を寝物語に聞いてきた私たちの心象風景でもある。それだけに、「私も柴刈りに行ってみたい」と主張するおばあさんの登場は、読者の心の深層にノイズを生じさせる。

2つには、無批判な思い込みに気づかせる。「男らしい」とか「女らしい」とかは、誰が決めしたことなのでしょう」と問うおばあさん。「そんなものは、昔から決まってる。常識だ」と答えるおじいさん。「常識は、世の中が変われば、それにつれて変わるものでございましょう……あなたは、桃子にもしものことがあったら、涙を流しますか」とおばあさん。「あ、当たり前のことを聞くな。大声で泣くに決まってるじゃないか」とおじいさん。このような質問の展開に、読者は

自らのジェンダーへの思い込みに気づかされる。

ジェンダーが歴史的な構築物であることを伝えるために「おはなし」が用いられたことの効果は大きい。著者のジェンダーの理解の確かさの上に、古典の教養の深さ、ユーモアのセンス、日本語による語りの力が、本書を現代人のためのおはなしに昇華させている。

おはなし

「主観的であり、かつ、他との何らかのつながりを有する説明の方法」(河合隼雄『おはなしの知恵』)。現代は高度に発達した科学の時代。主観的ではなく客観的な正しさが価値を持つ。ジェンダーに関しても生物学的性差に基づいた男女の特性論が根強い。本書は、例えば「モモタロー」ではジェンダーを逆转させ、「桃子」の主観的な「おはなし」を読者と共にすることで、ジェンダーの可変性を読者に納得させることに成功している。

りきだけ ゆみ
力武 由美 (日本赤十字九州国際看護大学特任准教授、北九州市立男女共同参画センター・コーディネーター)



<主婦>の誕生 — 婦人雑誌と女性たちの近代



■ 木村 涼子 著
■ 吉川弘文館
■ 2010年初版
■ 4,800円(税別)



産業化、都市化が進み、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業が成立した近代に、主婦は誕生した。本格的な主婦の大衆化は、戦後の高度経済成長期まで待たなければならないが、1920年代から30年代にかけて、「いつかは主婦に」と憧れる未婚女性たちをも取り込みながら、婦人雑誌は、数十万部から百万部もの発行部数に達した。現代のように、多様なメディアに囲まれていたわけでもなく、月に何冊もの雑誌や本を買える世帯がまだ珍しかった当時、女性たちにとって、月刊婦人雑誌は、貴重な情報源であり、数少ない娯楽の一つだった。

家事に役立つ実用記事や主婦の心得を説いた修養記事、幸せな結婚生活や豊かな消費生活を描いた連載小説などを通して打ち立てられた主婦像は、読者を引きつけることに成功した。同時に、読者の女性たちもまた、雑誌が発信する情報の受け手にとどまることなく、懸賞への応募や読者欄への投稿を通して、主婦というアイデンティティを自ら形成していく。

婦人雑誌というマスメディアが、性別役割分業に代表される近代的ジェンダー秩序の形成と再生産にいかに大きな役割を果たし、どのように主婦像をつくりだしていったのか、そのしきみが丹念に読み解かれた一冊である。

『主婦の友』

東京家政研究会(後の主婦の友社)の創立者、石川武美によって、1917年に『主婦の友』(1954年より『主婦の友』と改称)として創刊される。高度経済成長期には、『婦人俱楽部』などと共に四大婦人雑誌時代を築くが、1980年代後半から1990年代前半にかけて、『主婦の友』を除く3誌が、廃刊となった。生活情報誌へと大幅リニューアルをすることで、唯一生き残っていた『主婦の友』も、2008年、90年あまりの長い歴史に幕を下ろした。「婦人」や「主婦」をタイトルに冠した雑誌が、姿を消していったことは、雑誌が提示する主婦イメージと読者の求めるそれとの間に齟齬が生じていたことを物語る。

いしざき ゆうこ
石崎 裕子 (独立行政法人国立女性教育会館事業課専門職員)

刊・着本紹介



虐待と親子の文学史
平田 厚



■ 平田 厚 著
■ 論創社
■ 2011年初版
■ 2,400円(税別)



女性起業家・リーダー名鑑
—108人の108以上の仕事



■ 伊藤 淳子 著
■ (株)日本地域社会研究所
■ 2010年初版
■ 2,200円(税別)



祖父、ソフリエになる
—新米じいじ 初めての孫育て



■ エガリテ大手前 編
■ メディカ出版
■ 2011年初版
■ 1,200円(税別)



■ 長島 世津子 著
■ 丸善プラネット
■ 2011年初版
■ 1,800円(税別)



女の子からの出発
—ジェンダーの人間学
長島 世津子 著



■ 長島 世津子 著
■ 丸善プラネット
■ 2011年初版
■ 1,800円(税別)



平成23年版
高齢社会白書

■ 内閣府 編
■ 印刷通販(株)
■ 2011年初版
■ 1,800円(税別)



■ 安里 和晃 著
■ ダイヤモンド社
■ 2011年初版
■ 1,900円(税別)



ムープマークの付いた書籍は、ムープ図書室に配架しています。